

D13a Photometric and Spectroscopic Observations of Comet C/2002 T7(LINEAR)

井垣 潤也 (兵庫県立大学)、森 淳、坂元 誠、時政 典孝 (西はりま天文台)

リニア彗星 (C/2002 T7) は近日点通過の 2004 年 4 月末から 5 月にかけて日心距離が約 0.6AU にまで近づき 2 等級台になると期待され、ニート彗星 (C/2001 Q4) とともに 2 大彗星として大いに注目された彗星である。カラー変化は基本的な観測ではあるが、彗星において観測されている例はあまり多くはないため、貴重なデータとなる。我々はこの彗星のカラー変化を捉えるため、西はりま天文台口径 60cm 反射望遠鏡を用いて撮像観測が可能であった 2003 年 9 月から 2004 年 2 月の期間に B,V,R3 色撮像観測と可視低分散分光観測を行った。コマ部に注目して解析した結果、この彗星は太陽に近づくにつれて R より V,V より B バンドというように相対的に短波長側が明るくなっていくことが確認された。分光データからはダストに対するガスの比率が大きくなっていくことが確認された。光度変化から太陽に接近中に光度変化が停滞している時期が見られてた。同様な光度変化の例としてヘルポップ彗星 (C/1995 O1) が挙げられる。これに関しては位相角の変化に依存していると考えられる結果が得られている。本発表ではこれらのデータを基に、可視領域における光度変化について考察する。